

食べ盛り時代の思い出

2021年9月14日 太田隆次

自分の少年期の食生活を思い出すまま気ままに辿って見ました。

幼児期の「おやつ」との出会い

誰でも同じと思いますが幼児の頃の食べ物のことは殆ど覚えていませんが、5歳ぐらいの時だったか、父親が夕方帰宅して玄関でポケットから暖かいアンパンを呉れたことが、我が「おやつとの遭遇」でした。

その他、犬が描かれているキャラメルは駄菓子との最初の遭遇でした。当時「アイスクーキ」と呼ばれていた棒状のアイスクャンディの半透明の色合いは今でも覚えています。

育ててくれた両親には申し訳ないですが、幼児の頃のご飯やおかずのことは全然「記憶にありません」。

少年期の「米穀通帳」と「学校給食」との出会い

1. 「米穀通帳」との出会い

戦時戦後は「食料配給制」による米飯食が主食の食事でした。主食は「米穀配給通帳」略して「米穀通帳」、その他、副食類も隣組制による割り当て配給で、野菜も魚も「一家当たりの割り当て制」で、母親について買いに行った記憶があります。「いわし」を配給で買ったこともあります。

戦後も「米穀通帳」は残りました。私の家にも長い間、ありました。

参考:「米穀配給通帳」とは、1942年(昭和17年)4月1日から、日本において食糧管理制度の下で米の配給を受けるために発行されていた通帳であった。1981年(昭和56年)6月11日の食糧管理法の改正により廃止された。

参考:

米穀通帳 1世帯に1通発給されたこの通帳には、1日当たりの配給量が記入されていました。

指定された配給日に通帳を持って配給所へ行くと、通帳に印鑑を押してもらうのと引き換えに、その世帯の1日の配給量に配給日数をかけた量のお米を購入することができました。配給量は年齢や職業によって異なり、1941(昭和16)年当時、1歳~5歳が120グラム、6歳から10歳までは200グラム、11歳から60歳までは330グラム、61歳以上は300グラムに定められていました。

重労働とみなされる職業(農夫、漁夫、鉱物採取者、大工など)に従事している人には、配給量がやや増やされました。

この配給基準は、当時の1人当たりの平均消費量と比べて4分の3程度の量でした。(ウィキペディア)

親の苦勞が偲ばれます。

2. 「学校給食」との出会い — 米飯食からパン、ミルクも定食化へ

学校給食の体験は殆どの皆様が体験されたと思いますが、長い目で見ると、1945年制定以来の学校給食法による学校給食は、私達の家での食生活も、米飯食と並んでパンや乳製品も主食化しました。このルーツは何と「学校給食法」にあるのですね。アメリカの余剰農産物の押し付けも影響したそうです。

日本で全国の小学校や中学校などでパンミルク主体の給食が提供されています。「ララ物資」「スキムミルク」「コッペパン」「給食当番」など懐かしいですね。砂糖は茶色の「キューバ糖」でした。

現在の学校給食例です。

